

平成 27 年度における県立文化施設等の個別事業評価に伴う事業の視察について

○「生命の徴 ―滋賀と「アールブリュット」―

事業内容：新生美術館誕生に向けて新たな核になる「アール・ブリュット」を示す展覧会。県内の福祉施設のユニークな造形活動の歴史を概観しながら、その先進的な取組がどのように継承され、展開してきたのかを、作品を通じて展覧した。

会 場：滋賀県立近代美術館

視察日時：平成 27 年 11 月 12 日（木）および 13 日（金）14 時～15 時 30 分

出席委員：富永委員、直田委員〔12 日（木）〕、殿村委員〔13 日（金）〕



○（地域の元気創造・暮らしアート事業 企画提案公募 採択事業）

2015 秋の芸術月間 セイアンアーツアテンション VOL.7

「MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUM -近江のかたちを明日につなぐ-

事業内容：成安造形大学附属近江学研究所がこれまでの活動で培ったコンテンツ等をもとに、6つのカテゴリーに分けながら、新しい近江の姿を浮き彫りにすることを試み、滋賀県をリサーチし未来へ残したい滋賀のカタチを各々の視点で見出し展示した。

会 場：成安造形大学

視察日時：平成 27 年 11 月 19 日（木）および 20 日（金）13 時 30 分～15 時

出席委員：殿村委員〔19 日（木）〕、直田委員〔20 日（金）〕



【生命の徴 ―滋賀と「アールブリュット」―】

評価内容	左記に対する対応等
①アール・ブリュットというのは、非常に幅広いものと思われるので、土の作品から、絵画、映像等最新の作品も見られるといい。今後、シリーズで展開していくことを期待したい。	本展では、粘土作品のみならず、絵画・染色・刺繍といった広い表現内容を紹介することを心がけた。今後は必要に応じて映像作品の紹介も検討したい。
②視察は後期に行ったが、前期にも興味深い作品が出展されていたようなので、前期分(前期には後期分)を写真で展示するコーナーがあればいいと思った。	会期を通じて同じ内容で展示しており、前期・後期はない。展示の様子は写真に収め、年度末に記録集というかたちでアーカイブした。
③入場者数が見込みより少なかったのは残念であるし、有料観覧者が少なかったのは学校等の団体鑑賞の影響であると推測されるが、まだ、アール・ブリュットが人口に膾炙していない段階ではやむを得ないであろう。今後タイトルである「生命の徴」ということをアピールしていくことで関心を広げて行くことを期待したい。	入場者数の獲得に向けて、NO-MA学芸員などを交えた戦略会議を行ったが、実績に結びつかなかったことは残念である。今後は広報戦略をもっと練り、作品の魅力アピールに努めたい。
④小中学校生の団体鑑賞が行われていたが、若い世代のほうが柔軟に作品を受けとめることができると思われるとともに、アール・ブリュットはアートとしても「難しい」面もあるので、しっかりした解説を行い理解を深める事が重要であると思われる。	会期中は展覧会担当をはじめ、複数の学芸員で展示内容の説明をするように努めた。アートとしての難しさについては、とりわけ美術専門家サイドでの議論が必須な時期にきていると思われるため、今後はこうした議論の場を設けていきたい。
⑤最も改善が必要なのは「なぜ、滋賀県が県立近代美術館でアール・ブリュットの展示を行うのか」というストーリーを構築し、広く発信することだと思います。 アール・ブリュットのルーツに、滋賀県だけの信楽焼き文化があることや、信楽焼きが滋賀県の日常に溶け込んでいたからこそ、昔から焼き物を障害者教育に取り入れてきたことなど、誰もが納得するストーリーがすでにあるのですから、もっと積極的に発信すべきだと思います。 このストーリーが広く知られることで、滋賀県特有の文化とアール・ブリュットへの関心が一層高まるとともに、滋賀県ブランドとして国内外に定着すると思います。県立近代美術館のリニューアルオープンとともに、「なぜ、滋賀県にアールブリュットが生まれたのか」その感動ストーリーを、公式サイトやパンフレットなどで紹介してはいかがでしょうか。	展覧会では、滋賀県の「アール・ブリュット」と呼ばれる作品の原点には、信楽焼やそれにとまなう粘土の製品作りがあったことに触れ、そこから造形活動が展開していったという歴史を伝えることに重点を置いた。なぜ滋賀でアール・ブリュットをとりあげるのか、その背後にある文脈やストーリーを伝えることを重視した展示内容を心がけたつもりである。今後も、作品を単に並べるだけではなく、その背後にある文脈を伝えることを大切にしていきたい。
⑥特に改善すべき点というのではないが、いただいたアンケートの結果を眺めていて、「直視できなかった」、「少し怖かった」などの意見が目についた。このような意見があるのは理解できないわけではないが、かといってこれを単純かつ安易に受け入れるのではなく、むしろアール・ブリュットの持つ深さに対する反応と考えて、今後の展示・解説に活かしていくことが望ましい。	アール・ブリュット作品には、柔らかい雰囲気のものから見るものの生理的感覚にうったえるような生々しいものまで幅広い表現方法がある点が特徴であろう。「少し怖い」「直視できない」という感想は、アール・ブリュットの本質を言い当てている言葉であるとも考えられる。こうした様々な反応を呼び起こす作品の在り方について、今後も展覧会等を通じて考えていきたい。

【2015 秋の芸術月間 セイアンアーツアテンション VOL.7
「MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUM -近江のかたちを明日につなぐ-」】

評価内容	左記に対する対応等
<p>①改善ではないが、会場がやや遠方の大学校内であったので、足の便がやや悪く、広く県民がアクセスするにはやや難があったと思われる。一方、わざわざ訪ねていくという行動を誘発する内容でもあった。ただし、イベント情報が県民に届いていたのか懸念が残る。</p> <p>そのためには、広報が充実している必要があるのと同時に、この展示を見に来たついでに学生の制作物を見るときか体験できるとかの＋αを仕掛けることも効果的と思われる。</p>	<p>あくまでも大学ですので、美術館としてのアクセスや広報には、予算的にも限界があります。ただ、大学の美術館として、ここでしかできない、又は体験できないイベントを打つことで、多くの人たちに来学していただくことも日常的に考えております。</p>
<p>②今回の展示を、もっと県民に見てもらうため、県内を巡回してはどうだろう。全部でなくとも、会場の関係で一部のみでもよいと思われるが。展示施設だけでなく、駅ナカ、商店街や銀行、学、公共施設校等を会場としてみると、思わぬ広がりが出るのではないかと。身近な素材が多いこともあり、出会う機会さえあれば多くの人の興味を引き、郷土への関心につながっていくと思われる。</p>	<p>内容によっては、県内の巡回も可能かと思われます。ただ、スタッフの問題や、予算などハードルは高いような気がします。地方開催の展覧会として意義ある内容を考え、招待していただけるような努力も検討する必要があると考えています。</p>
<p>③学内イベントを一般イベントと位置付けない方がいいと思います。</p> <p>何事にも最低限の「社会的な通念に照らした位置づけ」が必要であり、イベントにも、時代の一般常識をベースに意義と目的を明確にすることが必要になります。</p> <p>「常識を破る」「常識を超える」という概念はもちろん大切ですが、それはただ叫ぶだけでは何の意味もありません。それどころか「キャンパスに一般の人を呼び込むほど、この大学は困っているのか」といった逆イメージの喚起にもつながってしまいます。</p> <p>一般的には「大学とは学生のことを一番に考え、安全で静かな学習環境をつくるもの」といった考え方が定着しているためです。</p> <p>もし、このスキームを一般向けイベントにしたいのであれば、「エクステンションスクール」の枠組みで特定時間に開放するか、「学園祭」といったような「誰もが納得する理由」と「入りやすい賑わい」を示し、教育機関のセキュリティを気にする現在の”心の壁”を取り払うひと手間が必要でしょう。</p>	<p>常に大学に設置された美術館であることを念頭に置いております。不特定多数の一般者向けの展覧会を企画しているわけではありません。学生・教員の研究のためや研究成果の発信、社会に対して強く訴えかける作品展示やイベントの開催等に心がけております。そういう意味では、一般的でないかもしれませんが、今までに無い、未来の社会に必要な意味合いを持った試みにチャレンジしていくことが、大学美術館としての役割であるとも考えています。そして、広く一般者にも発信しながら、新しいものづくりの現場を知っていただくことも大切だと考えております。</p>